

子どもから見たステップファミリー —家族内呼称や苗字をめぐる—

内海 璃子

昨今、家族の形は多様化している。厚生労働省による令和5年度「令和5年(2023)人口動態統計月報年計(概数)の概況」によると約3組に1組は離婚していることがわかる。また内閣府男女共同参画局による令和4年「結婚と家族をめぐる基礎データ」によると婚姻の約4組に1組が再婚となっている。これらの状況を踏まえ、初婚継続家庭が当たり前ではないことがいえる。子どものいる再婚家庭は「ステップファミリー」という用語で表現されていることが多い。

先行研究から、ステップファミリーにおける家族モデルには2つのタイプが存在すること、そして非役割期待呼称を用いる家族の方が、家族に対して寛大なイメージを持つ傾向があることが明らかになった。これを踏まえ、本研究では2つの目的を設定した。1つ目は、提唱された家族モデルを前提に、インタビュー対象者の家族がどのモデルに当てはまるのかを考察しながら、対象者およびその周囲の人々とのコミュニケーションの実態を明らかにすることである。2つ目は、ステップファミリーにおける呼称や苗字の変化の過程を明らかにすることである。

研究方法は、半構造化インタビューと文献調査を行った。調査期間は2023年4月1日から2024年12月31日である。調査対象者は、親に離婚・再婚経験があるまたは別のパートナーがいる20代から30代の男女10人である。

本研究ではステップファミリーを分ける指標として「時間軸」と「関係軸」を設定した。第2章では生まれながらにしてステップファミリーであった者3名、第3章では親の離婚・再婚を経てステップファミリーとなった者4名、第4章ではステップファミリーになる可能性がある者2名、第5章では世間が想像しやすい典型的なステップファミリーの当事者1名を紹介した。ステップファミリー内でも個々の体験や関係性に応じて多様な物語が形成されていることが明らかになった。

また家庭内呼称は大きな違いが見られなかった一方で、苗字の変更の有無に関しては約半分に分かれていることが明らかになった。これらの変更理由は全て母親が関連していることもわかった。このことから、母親の存在が家族の関係性や苗字の選択に大きく影響していることが明らかになった。

(指導教員 照山 絢子)